
ヤミとホノオの魔法使い

伊織悪紅疾

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ヤミとホノオの魔法使い

【Nコード】

N8099P

【作者名】

伊織悪紅疾

【あらすじ】

JS事件から少し経ったある日のこと。その事件は起きた。一人の少女が行方不明となる事件。どこにでも起こりうる事件に見えたがこの事件をきっかけに再び活動を開始する機動六課と行方不明となった少女と少女を攫った男の運命の歯車が動き出す。これは少女と少女を攫った一人の男の物語。

第1話 『終わりは絶望、始まりは魔法』

「――」

夜。

人気のない公園で繰り広げられる、男と女の営み。

だが、これは同意の上でしていることではない。

少女は手で口を塞がれ、身動すら取れないような状態にされている。

そして、男は無理やり少女を貪る。むさぼる。ムサボル。

「――っ!？」

悲鳴を上げようとしても、少女の声は誰にも聞こえない。

少女は叫べない。

暴力とも似たその行為は少女の心をズタズタに切り裂く。

もがく。

快樂。

もがく。

快樂。

もがく。

快樂。

もがく。

快樂。

その永遠とも言えるような行為が続く。

「・・・・・・・・」

「・・・・あ・・・・あ」

男は少女を貪り続ける。

それを受け入れる少女の瞳にはすでに生気が感じられない。

虚ろな目でそれを受け入れ続けている。

そしてそれは唐突に終わりを告げた。

「————くっ！」

「っ!？」

事が終わり、少女はというと

「・・・・・・・・」

もはや声を出すことさえできず、少女の瞳は閉ざされた。

男は氣を失った少女を見下ろしている。

そして何を思ったのか、その少女を抱きかかえた。

「・・・ゲートオープン」

突如、男を中心として魔方陣が展開される。

転移魔法と呼ばれる魔法で、対象を自分の知る場所へと移動させる魔法である。

その効果は自身の持つ魔力に影響する。

男は魔法を唱える。

「次元転送。場所は」

少女を連れて

「『閉ざされた箱庭』へ」

そして、公園には誰もいなくなる。

ただあるのは、街灯の光と辺り一面を包み込む暗闇だった。

第2話 『閉ざされた箱庭と少女の覚醒』前編』（前書き）

あけましておめでとうございます！

昨日更新した第2話に対してちょっと考えることもあつて、少し改変して再度更新させていただきました^^；

とりあえず楽しんでいただけたらうれしいです

（^^）

ではどうぞ♪

第2話 『閉ざされた箱庭と少女の覚醒（前編）』

「・・・・・・・・」

男が辿り着いた先は、青い空の下、広大な草原の中心だった。

そこには1軒の白い家以外何も無い。

その光景は、美しいというよりも寂しさが満ち溢れていた。

「ここまで来るのに、また魔力を大量に消費したか」

転移魔法は誰にでも使えるわけではない。

それ相応の魔力総量とそれに対する魔力レベルなどが関係してくるからだ。

魔力総量とは、自分自身が持っている魔力の総量のことである。

それに伴い、魔導師ランクなども変化してくることは誰もがわかることではある。

では魔力レベルとはなんなのか？

魔法を使うということは、魔力だけでなくそれなりの技術、経験が必要となってくる。

より強い魔法、より精励された魔法を使うのには技術が必要とされる。

それだけではただ『使える』というだけになってしまう。

多くの訓練や、実際にそれを使う回数などによって経験値が上がってゆくものである。

扱う魔法に対しての理解をし、そこからどういった応用ができるかななどを模索し、そしてそれを使うことによって

初めて『魔法を使える』から『魔法を使う』に変わるのである。

ここで語る魔力レベルとは、つまり『魔法を使うための技術と経験』のことである。

男がそれを使えるということはそれだけの魔力と魔力レベルを備えているということになる。

「・・・戻るかな」

男は独り言のように呟いて、その場を後にした。

腕の中で眠る一人の少女を抱えて。

「・・・ん」

少女が目を覚ました時、初めに目にしたのは真っ白な天井だった。

何の飾りもないベッドの上、ただ真っ白に染まった白い部屋。どこ

かの病院だろうと思った。

だんだん意識が覚醒してくると同時に、脳裏に焼き付いた絶望に似た感覚が思い出される。

「あ・・・あ・・・」

少女はベッドの上で頭を抱えた。

そして、思い出される。自分の身に何が起こったのかを。

「っ・・・ぐすっ・・・！」

声にならない嗚咽を漏らす。涙が溢れて止まらない。

だが、いくら泣いても拭い去ることのできない記憶。

穢された。

汚された。

ケガサレタ。

ヨゴサレタ・・・！！

「ううううう・・・ああああああああ・・・！！！！」

少女は泣く。

少女は叫ぶ。

少女は嗚咽を漏らす。

そのたびに思い出されるあの時の穢れた記憶。

そのたびに少女は泣く。

そのたびに少女は泣き叫ぶ。

そのたびに少女は思い出す。

「・・・うっ！うあああああああああああああああああ
！！！！！」

そして、その泣き叫ぶ声を隣の部屋で一人の男は聞いていた。

（そろそろいいかな・・・）

少女の泣き叫ぶ声が聞こえなくなったので、男は部屋に入ることにした。

ガチャッ

男は少女のいる部屋のドアを開けた。

「・・・っ！」

男の目に映るのは、泣きじゃくって顔を腫らしている少女の姿だっ

た。

「やっと起きたか」

男は少女に語りかけるが、その瞬間鋭い視線を感じた。

殺意、憎悪、憎しみ、恐怖、怯え。

そういった今でも殺してしまいそうな、それと男に対しての恐怖の視線を送られたが、全く男は動じない。

男は少女に近づくと、少女はベッドの上で体を震わせながらではあるが、

男と対峙するような体勢を取った。

「そう警戒しないでくれるかい？こっちは別にあんたのことをどうこうしようとは

・・・ってもうすでにしちまったか」

「っ！..!」

少女はいきなり枕を投げてきた。

ぽふっと音を立てて、枕が顔に当たって落ちた。

「あ」

「・・・ピクッピクッ」

眉間をピクピクさせながら男は無理に笑顔を作ろうとする。

「とりあえず、だ。こんなところで話をするのもなんだから、飯を食いながら話をしないか？色々話したいことがあるからな」

無理して笑顔を作ろうとした顔が怖かったのか、少女はコクッコクツと頷いた。

確かに眉間をピクピクさせてるやつが満面の笑顔で話しかけてきたら

それは恐怖でしかないだろう。

「それじゃ、隣の部屋にいるからな。あ、服はこのクローゼットに入ってるからどれでも好きなやつ着てくれ」

男はおもむろにクローゼットを開けて見せた。そこには女物の服ばかり入っていた。

「・・・・・・・・」

「・・・・・・・・」

「趣味だ」

少女はすごく引いた。

「冗談だ、そんなに引くな」

「じゃあ、なんであるの？」

「・・・・・・・・」

「・・・・・・・・」

無言で男はドアを開けて隣の部屋に移動しようとする。

「ちょっ！？待ちなさいよ！！なんでって聞いて――」

最後まで言葉を聞かず男は部屋を出た。

後ろで何か喋っているようだが男はそんなことを気にも留めない。

「さて、と。どうするかな」

男は少女が来るまでに女物の服のことやら、これからのこと。

それと料理を何作るかを考えた。そしてあることにも気がついた。

（少し、視線が柔らかくなってたな・・・）

第2話 『閉ざされた箱庭と少女の覚醒（前編）（後書き）』

3日以内には後編を書きます（キリッ

第2話 『閉ざされた箱庭と少女の覚醒（中編）（前書き）』

遅れて申し訳ございませんでした。
言い訳は言いません。

そう、私のミスだから！

えと、まじすみませんw

後編を書くつもりが中編になってしまった。。。。

今度はたくさん文字書こうと思います。。。。

第2話 『閉ざされた箱庭と少女の覚醒（中編）』

「簡単な食事で行くかな・・・」

男はキッチンの前に立ち料理を始めた。

簡単とは言ったものの、簡単で少なめな方がいいか、簡単で多めな方がいいか迷っていた。

（まあ、あいつが残したら俺が食べばいいことか。俺自身、今は腹が減ってるからな）

そう考えながら、手際よく調理していく様は一人暮らしをしている男の料理風景に見えなくもない。

料理に関しては、頭を使うというより体が覚えている、という風に近い。

マルチタスクを用いることで、こういうことは簡単にできたりするものだ。

そして、男はあることを考えていた。

それは少女のことである。

正直、自分のミスで彼女を巻き込んでしまったようなものだ。

完全に巻き込んでいないとしても、もう元の生活には戻れないだろう。

理由はいくつかあるが、ここではあえて語らないことにしよう。

（いっそ、巻き込むか・・・いや、彼女にも自分の生活があるだろうし・・・）

男は考えた。

が、考えるまでもないことだった。

「そうだな、今更・・・元になんて戻れやしない」

それは少女に向けた言葉なのか、自分に向けた言葉なのかわからない。

だからだろうか。男は誰もいない部屋にこう言った。

「ならば、俺は『悪』になろう。お前らの『悪』になろう」

男は静かに口ずさむ。

「街を揺るがす大いなる存在になろう。国を滅ぼす存在になろう」

男は静かに口ずさむ。

「世界を打ち砕く存在となろう。全てを奪う存在となろう」

男の頭の中を言葉が埋め尽くす。

奪え。

倒せ。

犯せ。

砕け。

殺せ。

焼き尽くせ。

男は徐々に目的を形にしていく。

男の頭の中で繰り広げられる妄想の世界。

街が燃える。

国が燃える。

人が逃げ惑う。

人が死んでゆく。

世界が滅んでゆく。

世界が死滅してゆく。

男は妄想する。

男は想像する。

そして、男はそれを創造する者。

男はそれを形にする者。

（くくく・・・そうか、これが俺の本質だったな・・・!!）

男が顔が歓喜で歪む。

（そうだなあ、手始めにあそこを滅ぼすか）

邪悪めいた顔で男は呟いた。

「お前らが最初の敵だ、機動六課・・・！」

料理をする男の手はいつの間にか止まっていた。

（はぁ・・・なんでこんなことになってるんだろ）

少女は一人クローゼットを漁りながら考えていた。

なぜ自分がこんなところにいるのだろう。

なぜ自分だけこんな目に遭わなくてはいけないのだろう。

そんなことばかりが頭の中をぐるぐる回っている。

（それに・・・）

ふと思い出してしまった辛い出来事。

記憶からは消せない辛く、穢れた記憶。

（――っ！）

少女は頭を横に振って考えないようにした。

「悩んでも仕方ない！今できることをしよう！」

穢れた記憶を頭の隅に追いやり、少女は再びクローゼットの中を見る。

そこには女物の服がずらりと並んでいた。

そこから一着取り出して、丈を合わせてみた。

「って、なんで私にぴったりなの、この服」

上下共に丈が少女とぴったりだった。

寝ているときに測られた可能性がある、と少女は判断したが

「ま、それも含めてあとできっちり白状させてやるんだから！」

とりあえず、自分に合った服装に着替えることにした。

少女は袖の長い服に短めのスカートを選んだ。

柄は特に気にせず、適当にあしらった格好になってしまったが、この格好が一番しっくりような気がした。

「これでよしと、ん？なんかいい匂いがする」

男が料理をしているのだろうと思った。

その瞬間、少女のお腹が鳴った。

（そういえば、あれからどれくらい経ったんだろう？）

とりあえず少女はおいしそうな匂いのする隣の部屋に移動した。

ドアを開けるとそこはごちそうの山だった。

「・・・は？」

最初に出た言葉がそれだった。

見た目は普通だが、何より驚いたのがその量だった。

テーブルの端から端まで埋め尽くされた料理。あまりの多さに吐き気がしそうだった。

「第一声が『は？』かよ。もっと感想はないのか、おい？」

「いや、多すぎでしょ、これ」

「まあ、簡単だからってちょっと多く作りすぎたが、大丈夫だろう？」

その根拠はいいたいどこから来るものなのかぜひとも聞きたいところではあったが、

それを遮るかのように少女の腹の虫が鳴った。

「っ!？」

少女が恥ずかしそうに顔を赤らめる。

それに対し、男はくくつと小さく笑い、

「・・・どうやら、お前の腹が食いたがってるようだな。まあ、なんだ。そんなところに立ってないで座れよ」

少女は顔を赤らめつつ、素直に椅子に座った。

男は少女が座ったことを確認して、対面するような形で椅子に腰掛けた。

「いただきます」

「・・・いただきます」

二人共、礼儀正しく手を合わせて言った。

そして、食事を始めたのだった。

第2話 『閉ざされた箱庭と少女の覚醒〜中編〜』 (後書き)

次は後編です。

箱庭についてと少女が覚醒します。

やっとですね W W

第2話 『閉ざされた箱庭と少女の覚醒（後編）』（前書き）

長くなってしまった・・・

というか、更新遅れて申し訳なく想っております。；；

とりあえず、書けました！

感想待ってまゝす

第2話 『閉ざされた箱庭と少女の覚醒（後編）』

黙々と食べる二人だが、勢いだけが違っていた。

男はテーブルに並べられた料理が、勢いよく無くなっていくのを見て

「・・・よく食うなあ、どんだけ食うんだよいたい」

そんな感想を漏らした。それに対し、少女は

「・・・・・・・・」

男の言葉に何の反応も見せず、黙々と料理を平らげていく。

その様子を見て、男は苦笑しながら

（ま、食べるだけの元気はあるってことだな）

そして男は自分の分の料理を食べ始めた。

食べ始めてどれくらい経っただろうか。

テーブルの上には空き皿が大量に広がっている。

普通の人では到底食べきれないような量だったのだがこの二人はそれを食べきっていた。

特に多く食べたのが、以外にも少女のほうだった。

テーブルに乗せられた半分以上の料理を少女は一人で食べたのだ。

これには男は驚くほか無かった。

自分は半分も食べきれずにリタイアしたのに、そんな関係ないと言った感じで少女は完食した。

「正直、作りすぎたなと思ったがそんなの関係なかったな」

「.....」

そんな男の感想に対して、まともや少女は無言を貫き通す。

いや、正確には喋れなかったに近い。

自分を攫ったやつに対して、どう接していいものか。

また、自分はこれからどうなるのか、そんなことばかりが頭の中で渦巻いている。

男はふうつとため息をついて椅子から立ち上がると、キッチンの方に行き飲み物らしきものを取ってきた。

「ほら、茶だ。飲めよ」

そうやって男は少女の前にカップに入ったお茶を差し出してこう言った。

「別に毒とかは入ってないからな」

おそるおそる少女はカップを持ち、お茶を飲んだ。

お茶はすぐに底をついた。

「だから、毒とか入ってないってのに」

「・・・信用なるもんですか」

やっと喋ったか、と男は思った。

だが、少女の言っていることにも一理ある。

急に襲われ、攫われたりしたら誰だって警戒するものである。

最初は目の前にある大量の料理でさえも警戒していたが

自分があまりにも空腹だったのか我も忘れて食べ始めていた。

お茶を飲んだ後、二人とも何も話さず沈黙が続いた。

お互い何から話せばいいか迷っているのか、

少女はテーブルの下で手遊びをし、男はというと椅子にもたれ掛かって天井を見ているばかりである。

そして、先に沈黙をやぶったのは男のほうだった。

「さて、と。腹もいっぱいになったことだし、ちょっと外にでも出

るか」

そう言って男は椅子に立ち上がり、少女に話しかける。

「ほら、おまえも来い。話したいことがあるからな」

「・・・ここで話せばいいじゃない」

「こんなとこなんかで話せるかよ、息苦しい」

確かにこんな息苦しいところで話すよりかは外で話したほうが落ち着くだろう。

「外の空気でも吸いたいからお前も来い」

少女はしぶしぶそれに従うように椅子から立ち上がった。

外は晴れ晴れとした天気だった。

空には太陽、辺りにはどこまでも続く草原。

家から出て少し歩いたところで、男は止まった。

「見てみるよ、すごいだろこの景色！」

男は手を横に広げ、にこやかにこちらを振り向きながら言った。

「・・・で、本題は何？」

「おいおい、何も感想はなしかよ」

「そりゃ確かにすごいわよ」

「だろ？」

「でも、わざわざそんな話をするためにここに連れてきたの？」

少女はまっすぐな目をしてこちらを見て言った。

その目には未だに怒りが混じっているようだった。

いや、実際に怒りを含んでいるのだろう。

そして男は少女のまっすぐな視線を受け止めながら話した。

「・・・今から話すことは全て真実であり、現実だ」

男は静かに語り始めた。

「この世界のことの前に、お前のことを話しておこう」

「？」

少女は疑問に思った。

自分のことを話すと言ったが、何のことか皆目検討もつかなかった。
なぜここで自分の話題を持ち出そうとするのかさえわからなかった。

「正確には、お前の身に何が起きたか、かな」

「私にとって、あんたいったい何したのよ!？」

「何かをしたと言えはしたが・・・」

ここへ来る前、男は少女を弄んだのは確かだ。

だが、少女にはそれが何に繋がるかまではわからないといった表情を浮かべている。

その反応を予想していたかのように、男は話した。

「まさか、あれで目覚めるとは思わなかったがな」

「だから何がよ!？」

そして、男はこう言った。

「お前、魔法に目覚めたんだよ」

初めは何を言ってるんだと思った。

それは当たり前だ。魔法などというものはおとぎ話などで出てくるようなもの。

それを使えるようになりました、なんて普通は信じない。

だが、少女は知っている。

それを使える存在のことを。それを扱う者達のことを。

「この世にはまだ魔法に目覚めることのできない人間が多数存在する。

なら、どうしたら魔法に目覚めることができるのか？

それはどんな些細なことでもいい。

何かを守る時。酷く心が傷ついた時。事件に巻き込まれた時。生み出された時。

用はきっかけさ。そのきっかけがあるからこそ人は魔法に目覚めることができる」

少女は思い出していた。

あの時の記憶、自分が汚された時の記憶、泣き叫んだ時の記憶。

一瞬、眩暈がした。

その時のことは思い出さないようにしていたのに

男の話を聞いている内に記憶が呼び起こされた。

「じゃ、じゃあ私は・・・」

震える声で少女は男に問いかけるように言う。

「私にあんたにあんなことをされて魔法に、目覚めたってこと・・・？」

「まあ、完全とまでは行ってないが多少は、な」

少女はどういっていいのかわからず、体を震わせながら黙り込んだ。

少女にとって大切に守ってきたものが男の手によって奪われ

勝手に魔法に目覚めさせられたのだから。

「ちなみに」

そして、男はニヤリと笑い、少女に更なる追い討ちをかけた。

「正直、おまえじゃなくてもよかったんだよ」

「え・・・？」

「わからないか？おまえじゃなくても他のやつから奪えたんだよ俺は。」

だが、お前が偶然にもあの場所にいたってだけで俺に奪われたんだ」
とうとう少女は立っていられなくなり、地面に座り込んだ。

「はははっ！よかったじゃないか、魔法が使えるようになって！
おまけに卒業できたんだぜ！？一石二鳥じゃねえか！」

男は笑いながら少女に話した。

たまたまそこにいただけで、たまたま通りかかっただけで。

そんなので、自分は犯され、弄ばれ、奪われた。

「う、うう・・・」

少女は両手を顔に当て、泣いた。

「う、うう、ああああああああああ！！！！！！！！！！」

少女は泣き喚いた。もう何も考えたくない、何も感じたくない。

「・・・・・・・・」

男は満足そうな笑みを浮かべながら少女の泣く様を見ていた。

それもそのはず、これは全て男が用意したシナリオだからだ。

（これで下準備は整った！あとは・・・）

男は少女に近づき、無理やり立たせた。

「おい」

「っ!?!」

そして男はいきなり、少女の服を剥いだ。

「や・・・いや・・・」

少女は男のやろうとしていることを理解したのか

拒否するように震えた声を出す、男は間髪要れず服を破った。

「バインド」

「!?!?!」

少女は逃れようとしたが、バインドで手足を拘束され、身動きが取れない。

男はなおも、少女へと手を伸ばす。

怖い

こわい

コワイ

恐怖

きょうふ

キョウフ

助けて

たすけて

タスケテ！

少女の想いは届かなかった。

そして、酷くいたぶられた後、気を失った。

（誰も助けてくれない）

ドクン

（誰も助けに来てくれない）

——ドクン

（だれもたすけてくれない）

——ドクンッ

（ダレモ）

——ドクンッ！

（タスケテクレナイ）

——ドクンッ！！

（ワタシヲタスケテクレナイ・・・！）

「そう、おまえは一人だ」

「うあああああ　あああああ　あああああ　あああああ　あああああ
あああああ　あああああ　あああああ　あああああ　あああああ　！！！！！！！！！！」

あたり一面光の渦に飲み込まれた。

「くっ！」

男は咄嗟に距離を取った。

光の本流。魔力の本流。

それは少女が覚醒した光だった。

第2話 『閉ざされた箱庭と少女の覚醒』後編』 (後書き)

タイトルが間違ってないか？

なんて思わないでねw w

一応、まじめに考えた末、やっぱりこれで行こうと思ったんですから！w

さて、少女は覚醒しましたね。

あと、名前をそろそろ出します^^b

いったい誰なんでしょうね^^

(わかる人にはわかるかな？w w)

第3話 『悲しみの少女と互いの目的』 (前書き)

やっと更新

疲れた

遅れて申し訳ないです^^;

そして男と少女の名前発覚!?

第3話 『悲しみの少女と互いの目的』

光が爆ぜる

光が爆ゼル

ひかりがはぜる

ヒカリガハゼル

少女を中心として、辺り一面光の世界へ変わった。

その光の中で、男は両手を広げ、高々に吼えて見せた。

「はははっ・・・！とうとう覚醒したか！？この時を待っていた！
！」

男はなおも笑い続ける。

（これでラストステージへの扉が開いた！だが、まだまだ！まだ、そのステージに上がるのは早すぎる）

そして、徐々に光はその中心へと収束されていく。

（まずは目の前の少女を手なずけないと、な）

光の中心、そこには少女が一人、宙に浮いていた。

光は少女へと吸い込まれていく。

そして、草原を覆い尽くしていた光は消えた。

「・・・・・・・・」

少女はゆっくりと地に足を着ける。

その姿はあまり以前と変わらないように見えるが

以前は茶色い短髪だったが、今は金色のように光り輝く長髪に変わっていた。

他に変わった点は見受けられなかったが、少女から発せられる魔力が

満ち溢れていることを男は感じ取っていた。

地に降り立った少女は、呆然と自分の体を見る。

特に異常はない。

しかし、少女は自分の中に流れる血液以外に違うものが流れているように感じていた。

「不思議な感じだろ、魔力に目覚めるってのは」

男に話しかけられそちらを見る。

「自分の中を駆け巡る血とは違った流れ。それが魔力だ」

少女は再び視線を落として、自分の両手を見る。

血液とは違った、流れを感じる。

それが自分の中に流れる魔力だと核心した。

「これで・・・私は」

そして少女は言った。

「私、魔法使いになったんだ・・・」

「いやゝめでたいめでたい！これで晴れて魔法使いになれたな！」

男は拍手をしながら、少女へと近づいていった。

「魔法使いになれたのも俺のおかげだと感謝してほ、ぐぶふおっ！？」

男はいきなり顔面を殴られた。

少女は驚くような速さで男に近づき、勢いよく自分の右手で男の顔を殴ったのである。

男はそのまま、5メートル近く吹き飛ばされていた。

少女はというと、殺気を漂わせながら殴った勢いを殺さず、男に駆けっていく。

男は何事もなかったかのように少女に告げる。

その行動が少女を苛立たせたのか、ひたすら暴行を続ける。

どれくらいの時間が経ったのか。

男は再び立ち上がる。

少女はというと、疲れ果てたのか地面に膝を突いて俯いていた。

「はぁ・・・はぁ・・・な、なんで」

疲れ果てた少女は、男に話しかける。

「なんで、なんで・・・なんで！」

「・・・」

少女の顔が歪んでいく。

顔をくしゃくしゃにして涙を流しながら

「なんで！？なんで私なのよ！？なんでこんなことされなきゃいけないの！！」

なんで、ねえなんでよ！！」

少女の悲痛な叫びを男は黙って聞いていた。

「なんで・・・どうして!？」

「知るかそんなの」

男は頭をかきながら少女に言った。

「そんな・・・」

「さっきも言っただろうが。俺は誰でもよかったんだ。

たまたま、そこにおまえがいただけ、ただそれだけだ」

「く、――っ!!」

少女は男を見上げる。

殺意を込めて、自分をこんなにした男を睨み付けながら少女は言った。

「殺してやる・・・!」

少女の本気の殺意。

それを真っ向から受け止める男。

「殺せるもんなら殺してみろ。まあ、それは叶わないがな」

「そんなの・・・やってみなくちゃ・・・!？」

少女は怯んだ。

男が瞬時に発した殺気によって少女はびくりと体を強張らせた。

「力の差がわかっただろ、おまえは絶対に俺には勝てない」

男は少女に向かって一瞬だが殺気を魔力に混めて放ったのだ。

その気に飲まれて少女は動けなくなった。

ふむ、と男は顎に手を当て考え始めた。

そして何かを思いついたかのように少女に言い放った。

「それじゃあ、こうしよう。お前が俺に勝ったら好きにしてい」

男は少女に提案した。

明らかに少女が不利だと思われるこの状況で出した条件。

少女は無理に決まっているといった顔をしたが

「この場所から逃げることなんてお前には不可能だからな。

ならどうしたらいい？決まってる、俺を倒したらいいんだよ」

「・・・好きにしていってどういうこと？」

「なんだっていい。帰りたいと望めばそのまま元の世界に戻してやる。」

ただし、勝てなかったら勝つまでここにいてもらう」

「ちょっ！？勝つまでって・・・そんなの無理に」

「そんなことはないかもしれないぜ？正直、お前の魔力総量は高い。

それこそAAAランクくらいに、な」

少女は啞然としていた。

それもそのはず、自分にそれだけの魔力があるとは思わなかったからだ。

「まあ、理由はあるんだがな。

お前の魔力の大半は俺の魔力によって補われてるからな。

元々のランクは、そうだなCランクくらいじゃないか？」

またもや、少女は驚いた。

自分のランクからAAAまでの魔力を補っていると

この男はどれだけの魔力を秘めているのか。

そして少女にある疑問が浮かんだ。

「ちょっとまって。なんであんたの魔力が私の魔力を補うようにな
ってるわけ？」

「ん？ ああ、それはだな」

男は少女にとって衝撃的な真実を告げる。

「あの夜、あの瞬間からおまえは俺の使い魔みたいなのになったからだよ」

「・・・・・・はあ？」

「何を驚く？ 自分の使い魔に自分の魔力を与えるのは普通じゃないか」

「はあ！？ なにそれ、どういうことよ！？」

少女は立ち上がり、男に詰め寄る。

あの夜とは、少女が男の手によって全てを奪われた日。

その瞬間から、男は無理やりではあるが少女を自分の使い魔にしたのだった。

「ちょうど、人手不足・・・つつても最初は自分一人でやるところだったがな。」

まあ、一人増えたところでなんら問題ないと判断したからだ。

どちらかというと、仕事が楽になるって考えたからだ」

「やるって何をよ！」

そこで男は一つため息をついて少女に言った。

「機動六課の殲滅」

少女は固まった。

機動六課。

聞いたことはあった。

そしてどういう組織かも知っていた。

だから、少女は動揺を隠せなかった。

「って、知らないのも当然か。おまえのいた世界のやつらは

あの組織のことを知ら」

「・・・知ってるわよ、とっても、ね」

「・・・へえ、知ってたのか。それじゃあの組織のことも大体知ってるわけね」

少女が機動六課のことを知ってたのに対して、男は少し驚いたが

これは好都合と思った。

「まあ、なんで知ってるのかは別にいいとして。

お前にはあの組織の殲滅を手伝ってもらおう」

「・・・私がそれを手伝うとでも？というより、私がそれを許すと思う？」

「なら、俺と止められるか？」

「止めてみせる・・・！！」

「ふっ・・・」

男は自嘲気味に笑うと、少女に手を差し伸べた。

「・・・何のつもり？」

「何、これからは同じ目的で動くわけだ。とりあえず握手ってね」

「だから、私は手伝わないって言ってるでしょ！」

「なら、こうしよう。俺は機動六課の殲滅を目的に。

おまえは俺を止めることを目的に。これでどうだ？」

「・・・」

男の出した条件はあまりにも少女にとって時間を要するものだった。

「どうせここからは出られないんだ。

だったらおまえ自身が強くなって俺を倒せばいいことだろ」

少女は考えた。

そこに至るまでの時間にどれほどの時間を費やせばいいのか。

いつ男が動き出すかもわからないのに、自分が強くなり男を倒すとなると

相当時間が必要となるだろう。

これは賭けだった。

そして、少女が出した答えは、

「・・・わかったわ」

男の出した条件に呑むということだった。

「交渉成立だな」

男は機動六課を殲滅することを目的に。

少女は男の目的を阻止することを目的に。

こうして、二人の出会いの終わりが、

少女と男の物語は開幕を迎えた・・・

「と、そういえば」

成立したことを確かめるように握手をしようとして、ふと男は手を止めた。

「? どうしたのよ」

「まだ自己紹介がまだだったな」

二人はまだお互いに名乗ってはいないことに気がついた。

「俺の名前はシン。『シン・アリスガワ』」

男は自分の名前を名乗り、少女と握手を交わす。

「私の名前は――」

それに続いて少女も名乗った。

「私の名前はアリサ。『アリサ・バニングス』よ」

第3話 『悲しみの少女と互いの目的』 (後書き)

意外な人物！？

でもないですかね^^；

とりあえず、まだまだ続きます。

更新はやはり遅れますが
今後ともどうかご愛読お願いいたします^^

次回更新は未定

仕事よりけり

第1回 『設定資料』（前書き）

初めに申し上げておきますと

これはまだ最初の段階での設定のため、
今後色々変化していきますのでその点はご了承ください。

第1回 『設定資料』

主人公設定

名前…シン・アリスガワ

性別…男

年齢…18歳

身長…171.5cm

瞳の色…黒

髪型…若干ロング。肩くらいまで

髪色…黒

アクセサリー…緑のあるメガネ（黒）

※デバイスと魔力光は後ほど本編にて語ります。

主人公について

日本名は『有栖川 慎』

アリスの初めてを奪い、攫った張本人。

世界を滅ぼすという目的を持っており、最初の標的は機動六課。

言動からして、きつい物言いだが根っこはいい人。

基本的に面倒見のいい男。

だが、現在は心に闇が巣くっているようなものなので、

どんな卑劣な行為だってやってのける。

いい例がアリサとの出会いがそうである。

作者曰く

「悪に属するものって感じの主人公がいい」

と述べているため、このようなキャラが作られた。

アリサ・バニングスについて

リリナの知ってる人なら誰でもわかる、なのは達の友人。

詳しくはWikipedia参照

相違点といえば、アリサ自身が魔法に覚醒する点や、

アリサの本質に関わる点である。

若干オリジナル的要素が含まれているが、これは作者が

「この物語に必要な鍵の一つにするから」

という理由を元に作成しているからである。

第1回 『設定資料』 (後書き)

と、いう感じです。

さて

次回！

第6話は今週中に更新します！

ついでに絵も修行中

主人公の絵とか描けるようにがんばっておりますので応援よろしく
お願いします^^;

第4話 『部隊長と新たな事件〜前編〜』 (前書き)

えー

遅れてすみません

長い文章が書けず、前編という扱い

どうかお許しください；；；

第4話 『部隊長と新たな事件〜前編〜』

——機動六課内部通路

コッ——コッ——コッ——

彼女——八神はやては苦悩していた。

それもそのはず。

つい、最近とある大きな事件を解決したばかりで、

その後の処理などに追われているにも関わらず、

また事件が起こったからである。

それに今回は自分と深く関わりのある人物の身に起きた事件。

いや、自分達と言った方がいいだろうか。

正直、前の事件に関わってきた人達は全員ではないだろうが、

相当疲れが溜まっていることは間違いない。

「・・・なんや、ほんまにお構いなしやな」

はやて自身、結構お疲れなご様子である。

「ほんとですよ、度々事件を起こされて解決する身にもなってほし

いです」

リインフォース？もお疲れな様子でそれに答える。

だが、それはそれ、これはこれである。

事件とあらば、やらざるを得ない。

「まあ、でも」

はやては真面目な顔つきになってこうリインに言った。

「今回の事件だけはマジで私怒つとるからなー覚悟しときいや！」

言われたリインは顔を引き攣らせながらはやての後を追った。

――機動六課部隊長室

自動ドアを開けて中に入るはやてとリイン。

すでにそこには二人の女性が立っていてはやてを待っていた。

「お待ちせ二人とも」

「お待ちせしました」

はやてとリインは二人の女性に声を掛ける。

「遅いよーはやてちゃん」

「あはは、ごめんななのはちゃん」

高町なのはは待ちくたびれた様子ではやてに声を掛ける。

「まあまあ、なのは。はやてもさっき戻ってきたばかりなんだしそういうことは言わない」

フェイト・T・ハラオウンは、苦笑しながらはやてが

遅れてきたのは仕方ないと言ってなのはを宥める。

「フェイトちゃんははやてちゃんに甘いよー！」

「ちゃうでなのはちゃん。フェイトちゃんは誰にでも甘いんや！」

なのははフェイトが甘いというが、それに対しはやては、

誰にでもという所を強調して言う。

「もう、そんなことないよ！私だってたまには厳しくするときあるよ！」

「たまにやけどなー」

「もう、はやて！」

三人でそんな他愛の無い話をする中、一人だけ話に入れずにいた。

「うう・・・私だけそっちのけですかゝ！」

「あ、ごめんなリイン！悪気はなかったんや！」

空気になりかけていたリインに、必死に弁解をするはやてと、

それに対してうんうん、と頷く二人。

「どうせ私は空気ですよー・・・うう」

「あちゃー・・・完全に拗ねてもうた」

「ごめんね、リイン。あとでおいしいお菓子あげるから機嫌治して、ね？」

「お菓子！？わあい♪ありがとうございます♪」

機嫌を損ねたリインにフェイトはお菓子をあげると言う在即座に機嫌がよくなった。

なんとも現金なユニゾンデバイスである。

「ははは・・・さて、と。お喋りはこれくらいにして本題に移ろうか」

「せやね」

はやてとリインは自分の席へ。

二人は用意されていた椅子へと腰掛けた。

「さて、二人共。急に呼び出してごめんな」

はやてはまず二人に急に呼び出したことを謝った。

「ううん、大丈夫。ちょうどひと段落したところだったし」

「私もだよ。執務官の仕事とかあったけど、それも終わったところ」

二人共事件の後処理などしていたが、それも一通り済んだと言った。

実際、細かなことなどはまだ手を付けていないような状態だったが、

それははやての呼び出しを優先して考えての結果だった。

「さやか。ほな、本題に入らせてもらおか」

そしてはやては今回二人を呼び出した原因を話し始めた。

「今回、二人を呼び出したのは他でもない。ちよつとある事件があるってな」

「ある事件？」

「せや。まずは一応まとめといたから資料見てみてな」

そういうと、二人の前にスクリーンが表示される。

その資料にはこう書いてあった。

「『第97管理外世界（地球）で魔力反応があった後、一人の現地協力者が誘拐』って、どういうことこれ？」

「書いてあるとおりや。私達の故郷でもある地球で起こった事件や」

「現地協力者って・・・もしかして!？」

なのはは、まさかと思いはやてに聞いた。

「せや、なのはちゃんの考えてるとおりや」

はやては一息ついてこう言った。

「誘拐された現地協力者の名前は『アリサ・バニングス』。私達の友人や」

第4話 『部隊長と新たな事件』前編』 (後書き)

さて

次は早めに更新するようにします！

ほんとですからね！w

第4話 『部隊長と新たな事件〜後編〜』 (前書き)

さて

ここで重要なことをお伝えいたします。

キーワードについて

今後度々変更するかもしれませんがあしからず W

そして超重要なことがあります。

それはあとがきで W

第4話 『部隊長と新たな事件〜後編〜』

「・・・・・・・・」

なのはとフェイトは、はやての言葉に声を失った。

なのはは、呆然と信じられないといった表情を、フェイトは真剣なやや動揺しているが、真剣な面持ちをしていた。

そんな、二人を省みず、はやては話を続ける。

「今回のことを最初に知らせてきたのはすずかちゃんや」

月村すずか――

アリサ同様、なのは達とは昔からの友人である。

彼女はその日、アリサと共に遊びに出かけていた。

そして、時は夕刻。

いつもなら、迎えの車を呼ぶところだが、その日は珍しく歩いて帰る事になった。

そして、分かれ道のところでアリサと別れた後、すずかは自宅へ帰宅した。

だが、夜分にアリサ宅から電話があり、アリサがまだ帰ってきていないことを知らされた。

その後、すずかは御付の人たちと街中探し回ったが、アリサを発見することができなかった。

心配になったすずかは助けを求めるために、はやてへ連絡を入れたのだった。

「――と、いうことや」

「それで・・・手がかりはまだ掴めてないの？」

はやては顔を俯かせた。

「ごめん・・・まだなんの手がかりも掴めれてへんのや」

「そんな・・・」

「どうして、どうしてアリサちゃんが・・・」

なのはは誰に語りかけるでもなくそう呟いた。

「憶測で言うのもなんだけど、可能性としてはお金目的とかじゃないかな？」

アリサは日本で起業した両親の一人娘、いわばお嬢様である。

故に、そこを狙われた可能性が高いとフェイトは考える。

「確かに、その可能性は有り得るかもしれないけど」

「でもな、そう考えたとして一向に犯人からの連絡がないのはおかしいやろ？」

確かにそのとおりである。

金目的なら犯人はまずアリサの両親にコンタクトを取るだろう。

だが、それが一向にない。

そのため、犯人は金が目的ではないと考えられる。

「じゃあ、犯人の目的はいったいなんなの！」

「落ち着き！なのはちゃん！」

なのはは、立ち上がり怒声を放つ。

それをはやては冷静になれというが、

「落ち着いてなんかいられないよ！だって、今もアリサちゃんは一
人つきりなんだよ！？」

「そんなことはわかつとる！だから、今その対策を――」

「わかってないよ！！友達が攫われちゃったんだよ！！それを指を
咥えて待ってろって言うの！？」

なのはの怒声はまたもや高くなる。

我を忘れて、今にも飛び出して行きそうなくらいの勢いであった。

はやてもなのはの勢いに飲まれて怯んでしまっていた。

「もういい！今からでも私一人で探して――」

――パン！

なのはが部屋を出て行こうとした瞬間、軽快な音が部屋に鳴り響いた。

それはフェイトがなのはの頬を叩いた音だった。

「なのは」

「・・・フェイト、ちゃん？」

なのはは呆然と叩かれた頬を手で押さえた。

「気持ちはわかるけど、我を忘れて行動するのはもっと危険」

自分の頭が徐々に冷めていくのをなのはは感じた。

フェイトはそんななのはに優しく語りかける。

そして、なのはの肩に手を置き、

「なのはが冷静でいられないのはわかる。でも、忘れてない？私もアリサの友達なんだよ？」

「あっ・・・」

「それに、一人で助けに行こうとしないで。よく言うでしょ？一人より二人ってね」

「フェイトちゃん・・・」

フェイトはなのはに微笑んで言った。

なのははうつすら涙を浮かべていた。

「ちゃうで、フェイトちゃん。二人より三人やで？」

「ふふ、そうだったね」

いつの間にかはやても二人の傍に来ていた。

そしてはやては二人の手を持って言った。

「アリサちゃんは私達の友達や。だからこそ協力してアリサちゃんを助け出そう。三人で、な」

「はやてちゃん・・・」

なのはは、耐え切れなくなり、涙を流す。

「リインも協力するですよ！」

「あはは、そうだね。ありがとうリイン」

涙を拭って、リインをそっと撫でる。

撫でられたのがうれしいのか、リインは顔を綻ばせる。

「さて、なのはちゃんの暴走も止まったとこやし、本題に戻るか」

「もう、はやてちゃん！」

なのはの態度に三人は笑う。

それがおかしかったのか、なのはも一緒になって笑った。

（そうだね。私は一人じゃないんだ。頼もしい仲間がいる。だから待っててアリサちゃん、きつと助け出して見せるから！）

そうなのはは決意を抱いた。

落ち着いたところで四人は再び椅子に腰掛け話を始めた。

「それで、はやて。対策はもう練ってあるんだよね？」

「一応、本局の魔導師。それとエイミィ達に協力してもらってるとこや」

そこで、ふとなのはが疑問を抱いた。

「エイミィさん達はわかるけど、なんで本局の魔導師まで？」

なのはが疑問を抱くのもおかしいことではない。

管理外世界で起こった事件のはずが、魔導師が出るのはおかしい話だった。

「それなんやけど、すずかちゃんがアリサちゃんと別れた時間帯に微力ながら魔力反応が感知されたんよ」

そこでフェイトは何かに気づいた様子で、

「魔力反応・・・ということは」

フェイトの言葉にはやては続けるように言う。

「せや、相手は魔導師の可能性が極めて高いことがわかったんや」

「でも、なんで魔導師がアリサを？」

「もしかして、狙いは私達ってこと？」

なのはは、狙いは私達だという。

確かに、その可能性は十分に有り得る答えではある。

高ランク魔導師というだけで、嫌う輩がいてもおかしくはない。

「可能性としてはなあ。まあ、実際私らの行動を忌み嫌ってる者もおる、ということやろ」

「そんなことで、アリサちゃんを攫ったの!？」

「親しい間柄の人物を攫えば、絶対に私らが動くと言えんやろね」

親しい間柄である友人を攫って、誘い出す。

はやては、可能性としてなのは達に告げた。

「それで、はやてはこれからどうするつもりなの？」

フェイトははやてにこれからどうするのかを聞いた。

「正直、今すぐにも動きたいんやけど、立場上私達にそれは許されへん」

「そんな！」

なのはもわかってはいることではあるが、納得がいかないといった感じの顔をした。

「とにかく、今は私らにできることをする。それしかあらへん」

「私達の、できること・・・？」

「そういうことか。はやての考えてることがやっとわかったよ」

なのははどういうこと？といった感じではやてを見た。

フェイトはというと、はやての考えていることがわかったようだ。

そして、はやてはニヤッと笑い、二人に告げた。

「なのはちゃん、六課のメンバーをいつでも動かせるようにして
いて。フェイトちゃんはその補佐。あ、仕事のこともちゃんとやる
んやで？」

「はやてちゃん、それって・・・！」

なのはもはやての意図することがわかったように呟いた。

「さあて、また忙しくなるで！二人とも準備はええか？」

なのはとフェイトは顔を見合わせて頷きあった。

「もちろん！いつでも出られるようにしておくよ！」

「私も手伝うよなのは！」

「よっしゃ！じゃあ、いっちょ気合い入れていこか！」

こうして、再び機動六課は立ち上がるのであった。

「うう・・・また私は空気ですかー!!??」

リンは泣きながら三人に叫んでいた。

第4話 『部隊長と新たな事件〜後編〜』（後書き）

ご愛読ありがとうございました！

さて、超重要なことなんですが・・・

実は今後の展開なんですが

正直言います。

考えてませんww

といいますか、どのように完結させようか、どんな戦闘シーン入れようか

そんな感じですw

ええ、全く考えてません

その場でこれいいんじゃない？

というような感じで進めて行っております。

ぶっちゃけ、主人公の出生に関してさっき思いついたばかりなんですよこれがwww

まあ、そこから面白い繋げ方見つけたんでとりあえずそれを目処に書いていきますので

どうか今後ともご愛読よろしくお願いいたします^^

第5話 『其の名は闇、其の名は炎』 (前書き)

まあ、当たり前で遅い更新です。

最後の方に知ってる人は知ってるネタがありますが、どうしても入
れたかったのでそこはご了承願います^^;

第5話 『其の名は闇、其の名は炎』

「其は、力」

青い空。

広大な草原。

そこに佇む二人。

そのうちの一人――アリサの目の前に浮いている二つのデバイス。

そして、もう一人――それを真剣な眼差しで見つめているシン。

「其は、鎖」

彼女の足元には魔法陣が展開されており、アリサは手を広げ宙に浮いている。

アリサを中心とし、赤黒い光の魔法陣がゆっくり、円を描くように回る。

儀式――そう呼ぶに相応しい光景であった。

「其は・・・闇」

瞬間、二つのデバイスが黒と赤の光を発する。

『我は闇・・・人の心に住まう悪夢、故に世界の源』

一つの黒いデバイスが紡ぐ。

形は三角。凹凸もないただの三角の形をしたデバイス。

そしてその声は、男の声ではあるが少年を思わせるような声色だった。

『我は炎・・・情熱の赤、全てを燃やし尽くす赤、故に世界の源』
もう一つの赤いデバイスが紡ぐ。

逆三角を描く、これもまた凹凸がないただの逆三角の形をしたデバイス。

大人びた、それでいて優美な声色。

「我はアリサ・バニングス——世界に住まう者、世界に惑わされし者、故に世界の支配者」

アリサが紡ぐ。

長い髪が宙を揺らぐ。

普通の服に普通のスカート。

だが、それに相反するような赤黒い光を纏っていた。

『闇こそ力、力こそ全て』

『我らの前に敵はなく、我らの後に敵はなし』

「我ら三位一体の存在なり」

言葉を紡ぐ。

言葉が紡がれる。

その言葉にはどんな意味があるのか。

それを知る者はここにいる二人と二機のデバイスしかわからない。

光が一層強く輝き始めた。

儀式が終わりを迎えようとしていた。

そして、アリサと二機のデバイスが最後の言葉を紡ぐ。

『『我らは——』』

少し時間を遡って、アリサとシンが約束という名の契を交わした後
の話。

お互いに握手を交わしたあと、アリサはシンに連れられて家の地下に案内された。

そこは普通の家には似合わない光景だった。

その部屋だけやたら技術が発展したような機械に囲まれた空間。

大きさからして、一階の部屋の二倍近くはある巨大な部屋だった。

アリサは驚きで目が離せなかった。

「驚いたか。ここはこの世界唯一のメインコンピュータールーム。ここじゃあらゆる世界の情報を見ることができる。まあ、もつとも全ての世界をつてわけにはいかないがな」

「・・・すごい」

シンが言うと、アリサは素直に感心していた。

それもそのはず、彼女自身ここまで整った設備を目の当たりにしたのは初めてのことだったからだ。

そこで、ふと部屋の中央を見た。

そこには、数種類のデバイスが収められていた。

「なに、これ？」

「そこにあるのは俺が作り上げたデバイスだ」

「デバイスって、これのこと？」

アリサはデバイスの一つを指差して言った。

「それ以外に何が、ってそういやデバイスもわかんねえんだったな」

アリサに対してシンは呆れたように溜息をついた。

それを見てアリサは、怒ったような顔をした。

「当たり前よ！魔法についてなんてさっぱりわからないだし。それにこのデバイスってのが何なのかもわかんないし」

それを聞いてシンは、はあとまた溜息をついてデバイスについて語った。

「簡単に言うのだな。デバイスってのは俺達魔法使いが魔法を使うのに使ってるやつだ。まあ、補助的な役割だな」

「ほんと、簡単に説明するわね」

「ったく、他にどう言えってんだよ。まあ、あと付け加えるとしたら、各分野ごとに特化したデバイスってのが数種類あるってことくらいだな。ちなみにここに置いてあるやつは全部インテリジェントデバイスと呼ばれるもんだ」

ふーん、とアリサは興味なさげにそこに収められているデバイスの一つを手を取った。

西洋の剣に似せて作ってあるのか、両刃がありどこか機械的でアリサが使うには少し重く扱いにくい感じであった。

「まあ、好きなの持っていけ。どうせおまえのもんになるんだからな」

そう言われたら迷ってしまうのが人というものだろうか。

アリサはデバイス達を見て回った。

西洋の剣に似せてあるやつ。

日本刀のようなやつ。

槍のような、ステッキのような、そんな様々なデバイスが置かれてあった。

その中で、アリサは一つのデバイスの前に立った。

そして、なんとなくそれを掴んで手にはめてみた。

それはガントレットと呼ばれる物で、ヨーロッパなどの甲冑の一部であり、一般的には手を防護するために作られたようなものだった。

アリサはそれが気にいったのか、何度も手を握り締めては放しを繰り返した。

だが、他にも気になる点があった。

それは片方しかなかったのだ。

（どうせなら両手にほしいわね）

それはすぐに見つかった。

ガントレットが置かれていたすぐ横、そこにそれはあった。

二つで一つ、というように置かれていたそれをもう片方の手にはめた。

そして、シンに振り向きこう言った。

「これにするわ」

「ほんとにそれでいいのかよ？」

「ええ、これであなたを殴ってやったら、さぞかし気持ちがいいことでしょうからね」

「使い方間違っていないか？それ、普通は手を守るためにあるようなもんだぞ？」

「いいのよ！私はこれが気にいった。だからこれにする。何か問題でも？」

「ねえよ、というか俺にとっちゃありがたいことだがな。なんせ防ぐだけのデバイスなんかで俺が倒せるわけないしな」

アリサはその言葉にむかっと苛立ちを覚え、それを口に出そうとした瞬間横からそれを遮られた。

『主よ！』

「え？」

アリスはどこから声がしたのかわからないといった様子で辺りを見回した。

すると、また声がした。

そこでやっとそれがデバイスから発せられた声だと気づいた。

『心配すんなって！この俺がちゃんと補助してやるから存分に攻撃してくれて構わないぜ！』

「デ、デバイスが喋った！？」

「インテリジェントデバイスにはAIが搭載されててな、意思を持つてる。まあ、相棒ができたって思えばいいんじゃないかね？」

とは言ったものの、アリスには信じ難いことであつた。

なんせ、機械が勝手に喋って自分に指示してくるものなど、生まれてこのかた見たことも聞いたこともなかったからである。

『主様』

今度はもう片方のデバイスから声がした。

『この私がいる限り、あなたに危害は加えさせません。ですので、存分にお力を——私を使ってください』

「え、あ、うん。そうさせてもらおうわ」

『ちょっと待て。お前じゃなくて俺が使ってもらうんだよ!』

『何を言ってるんです? 私を使ってもらうに決まってるじゃありませんか。主様、あんな野蛮なデバイスではなく私を使ってくださいませ』

『てめえ・・・喧嘩売ってんのか!?!』

『やりますか』

『上等だこらあ!!』

デバイス同士の口喧嘩勃発。

なんともシュールな光景だった。

これが人の形をしていたら、さぞかしうつとおしいことこの上ない。

両手に着けているため、左右がとても騒がしくなった。

なので、挟まれた身であるアリサにとってはとても迷惑だ。

そして、そんなことをされて黙っているアリサではなかった。

「二人ともうるさい!」

とたんに、二つのデバイスは静かになった。

「なんだよ、今おもしろいところだったのによ」

シンはデバイス同士の喧嘩を物珍しそうに見ていたが、アリサが途中でそれを止めたため、不機嫌そうに呟いた。

「シン！」

「あん？なんだよ。決まったのか？どっちにするか」

「ええ、決まったわ」

『・・・・・・・・』

二つのデバイスは、先ほどのようなことはせず、ただ静かにアリサの答えを待つ。

アリサは一人と二つのデバイスにこう告げた。

「二つとももらうわ」

「・・・欲張りなやつだな、おまえ」

「そんなことないわよ、ちゃんと考えた上で二つとももらおうって思ったのよ」

シンが欲張りというが、アリサには理由があった。

「同じ形、同じガントレット。一つじゃ成り立たない。二つあってこそこの籠手。二つで一つ、だから私は両方もらうのよ」

『・・・・・・・・』

デバイスは黙っていた。

アリサの考えに対してどのように反応したら良い物か思考を巡らせているのだろう。

逆にシンは、アリサに対して否定的な言葉を言い放つ。

「二つ持つだど？ バカかおまえは。一つならいいが、使ったこともないやつを二つ一氣に使うっていう考えがどうかしてる。あくまでデバイスは補助の役割としてあるだけだ。それを二つも持つっていうのがありえない」

「いいの！ 私が決めたんだから文句言わないでよ！」

「はあ・・・・・・・・どうなっても俺は知らんからな」

シンは溜息まじりでそう答えた。

実際シンの言ってることは間違っではないだろう。

だが、アリサは両方使うと言い張る。

「なんでそこまで二つ持ちたがるかねえ」

「さっきも言ったでしょ？二つで一つ。ううん、私も入れて三位一体ね。それに私は魔法なんて使い方も知らないから、一つは魔法学、もう一つは戦闘知識をメインに教えてもらおうって思ったのよ」

「へえーただ単に一つじゃ可哀想とかそういった理由だけじゃないんだな」

「勘違いしないでくれる？可哀想とか思ったわけじゃなくて、何が一番お互いにとっていいのかを考えた結果でもあるわよ」

「お互いって、俺にとってか？」

「まあ、それもあるわね。この子達には主人である人物が必要不可欠。なら、私がいるから問題はないわ。そして、あなたにとってもよ。機動六課を攻めるって言うんなら私が少しでも強くなった方が楽に事が運ぶでしょ？」

アリサはそういうが心の底では絶対にそんなことはさせない、と思っている。

「なるほどな、だから二つってわけか。くくくっ・・・まあ、おまえの考えてることはそれだけじゃあないだろうが、あえて突っ込まないことにしとくかな」

シンはアリサの考えてることに気づかないわけがなかった。

確かにアリサがこちら側に付けば、事がうまく運ぶのは確かだ。

しかし、それは絶対に無理だとシン思っている。

なぜかわからないが、アリサは機動六課のことを知っており、それも親しい間柄の人物がいることは確かだろう。

だから、こちら側に引き込むことはまず無理だろう。

（そう・・・今はまだ、な）

シンは今はまだ、引き込むことはできないだろうがいずれはこちら側に付かせるつもりでいるようだった。

「絶対に付かないわよ」

アリサが念を押すようにシンに告げる。

「はいはい」

それをシンは軽く受け流すだけだった。

その後、アリサ達は再び草原へと向かった。

これが儀式をする少しの前——アリサと二機のデバイスとの出会いだ。

「其は、力」

青い空。

広大な草原。

そこに佇む二人。

そのうちの一人――アリサの目の前に浮いている二つのデバイス。

そして、もう一人――それを真剣な眼差しで見つめているシン。

「其は、鎖」

彼女の足元には魔法陣が展開されており、アリサは手を広げ宙に浮いている。

アリサを中心とし、赤黒い光の魔法陣がゆっくり、円を描くように回る。

儀式――そう呼ぶに相応しい光景であった。

「其は・・・闇」

瞬間、二つのデバイスが黒と赤の光を発する。

『我は闇・・・人の心に住まう悪夢、故に世界の源』

一つの黒いデバイスが紡ぐ。

形は三角。凹凸もないただの三角の形をしたデバイス。

そしてその声は、男の声ではあるが少年を思わせるような声色だった。

『我は炎・・・情熱の赤、全てを燃やし尽くす赤、故に世界の源』
もう一つの赤いデバイスが紡ぐ。

逆三角を描く、これもまた凹凸がないただの逆三角の形をしたデバイス。

大人びた、それでいて優美な声色。

「我はアリサ・バニングス——世界に住まう者、世界に惑わされし者、故に世界の支配者」アリサが紡ぐ。

長い髪が宙を揺らぐ。

普通の服に普通のスカート。

だが、それに相反するように赤黒い光を纏っている。

『闇こそ力、力こそ全て』

『我らの前に敵はなく、我らの後に敵はなし』

「我ら三位一体の存在なり」

言葉を紡ぐ。

言葉が紡がれる。

その言葉にはどんな意味があるのか。

それを知る者はここにいる二人と二機のデバイスしかわからない。

光が一層強く輝き始めた。

儀式が終わりを迎えようとしていた。

そして、アリサが・・・二機のデバイスが・・・

『『「我らは——」』』

最後の言葉を紡ぐ——

「闇と炎の魔法使いなり」

第5話 『其の名は闇、其の名は炎』 (後書き)

次回

アリサの修行編？

シンの調教教室？

まあ、そんな感じにする予定w

幕間 『少女が願う、夢、叶わぬとき』 (前書き)

更新しました。

幕間 『少女が願う、夢、叶わぬとき』

それは、とある小さな物語。

その世界に少女は住んでいた。

その少女には友達がいて、毎日楽しく過ごしていた。

遊んだり、笑ったり、時には泣いたり喧嘩などもした。

どんな些細なことも少女にとっては全てが幸せだった。

そんなある日

少女の友達が悩みを抱えていることを知った。

その子は平然としているが、自分には丸わかりだった。

しかし、あえてそれを言わない。

自分から言ってきたりくれるまで黙っていた。

悩んでいることがあれば言ってきたりほしかった。

それが友達というものだろうと少女は思った。

そして、少女はある決心をした。

悩んでたり、辛かったときには必ず助けあって行こう、と。

それは少女が始めて望んだ願いだった。

そして、それはいつしか願いから夢へと変わっていった。

（私達はこれからも悩み、苦しんでいくことがある。

でも、私達ならなんとかなる。

もしも、私が思い悩んでいたとしても、友達とならなんだって乗り越えられる。

そんな人生を私は送りたい。これからも・・・この先も——）

しかし、それはあることがきっかけで叶わなくなるなど、少女は思いもよらなかった。

少女が願い、夢を叶えるために誓ったそれは——

儚くも散り去った。

これは少女が夢を叶えられなかった時の物語・
・

幕間 『少女が願う、夢、叶わぬとき』 (後書き)

変身シーンとか描けたらいいなー・・・

第6話 『力の根源、心の闇』前編』 (前書き)

短い文章になってしまった・・・

まあ、更新遅らせないための手ではありますへへ；

第6話 『力の根源、心の闇』前編』

「セー——ット・ア————っプ!!」

眩い光と共に、少女は叫んだ。

そして光が止むと、少女は地面に降り立った。

その姿は今まで着ていた私服ではなかった。

バリアジャケット———そう呼ばれる代物であった。

魔力を用いて構成された服は、着用者のイメージによって作られる。

そして、今回アリスのイメージによって作られた服装は赤と黒の入り混じったあまり印象が良くないような感じの服装になった。

髪は左右に小さくまとめツインテールに。

上半身は半袖、下半身は長いロングスカートの下に短パンといった感じだった。

「この格好は・・・」

「それはお前のイメージに合った服装だ。バリアジャケットっていう、まあ防護服みたいなもんだな」

なるほど、とアリサは頷いた。

「とにかく、おめでとう、というべきか」

シンはぱちぱちと軽快に拍手を送る。

アリサはそれがうれしかったのか、やや頬を赤く染めた。

「あ、ありがとう。何よ、ちゃんとそんなことも言えるんじゃない」

「そりゃ、俺だってそれくらいは言うっての。てか、ツンデレっぽく言うな、きめえ・・・」

「きっ!?!? なんでもいって言うのよ!?!? それにツンデレとか言うな!」

すると、左手にはめたデバイスから声がした。

『落ち着け主。相手の思う壺だぞ!』

次は右手にはめたデバイスから声が掛かった。

『そうよ主様。こんなやつはほっといて早いところ修行に移りましょう、時間の無駄です。』

2機のデバイスがシンに向かって交互に罵声を浴びせた。

そんなことを言われて黙っているシンでもなく

「バラすぞ、おまえら・・・」

今にも、デバイスを解体しそうな雰囲気を書きながら呟いた。

『あん? てめえ、俺達をバラそうってのか?』

『いい度胸ね。でも、ごめんね。お子様と遊んでる暇ないの、わかる？』

明らかに見下した言い方をする2機のデバイス。

この時点でこの2機が個性豊かなのは一目瞭然だ。

「よし、わかった、アリサすぐそのデバイス取れ。今すぐこの場でバラしてやる」

『やんのか、てめえ・・・』

『やりますか』

シンとデバイスが口喧嘩という、なんともシュールな絵図だ。

「ストーーーーーッブ!!!!」

1人と2機が今にも戦いを繰り広げようとしたところをアリサは止めに入る。

「二人ともそんな喧嘩腰にならない！それとシンもそんなことでいちいち腹立てない！」

『すまねえ・・・』

『すみません・・・』

「けっ・・・」

口争いが止んで満足そうに笑顔になるアリサ。

そこでシンはある疑問をアリサに呟いた。

「てか、なんでデバイスのことを人扱いしてんだ？デバイスは物だろ、ただ魔法を使うのに有利にするだけの道具だろうが？」

「別に人扱いにしてるわけじゃないけど、この子達には知能があるんでしょ？だったら二人って言い方したっていいじゃない」

シンの言う事はもっともだとアリサは思う。

しかし、物だからと言って道具として扱うことはできなかった。

2機ともこの世に生きている存在であり、ましてや知能まで持ち合わせている。

そんな存在を道具として見ることはアリサにはできなかった。

「まあ、そうね。この子達をどう見るかって言われたら・・・相棒、かしらね」

「相棒、ね・・・」

『主・・・』

『主様』

2人ともなにやら感動しているようだった。

だが、1人は全く別のことを考えていた。

（じゃあ、俺の存在を知っても俺を人呼ばわりできんのかよ・・・）

「ん？何か言った？」

「いや、別になんでもねえよ」

シンは苦笑してなんでもないと言う。

彼の言葉の意図がわからず、首を傾げるアリサ。

今はまだ、彼の言葉を理解できる人はいない。

そう、今はまだ・・・

第6話 『力の根源、心の闇〜前編〜』 (後書き)

次回

第6話 『力の根源、心の闇〜中編〜』

乞うご期待ください！

第6話 『力の根源、心の闇〜中編〜』 (前書き)

特になし。

第6話 『力の根源、心の闇く中編』

「さてと、それでどうするんだ？」

シンの問いかけにアリサは意図がわからず、首を傾げる。

「どうするって、何が？」

「はあ？なに寝ぼけたこと言ってたんだよ」

シンは何言ってたかいつ、という感じでアリサに言った。

「デバイスは手に入れた。力も手に入れた。じゃあ、次はどうするっていう話になるだろ普通？」

「そ、そんなことはわかってるわよ！」

アリサはそういうが、その先のことを考えていないのは明らかだった。

と、そこでデバイス達がアリサに助け舟を出した。

『じゃあ、さっそく修行だな、主よ！』

『そうね、バリアジャケットも見に纏ってるし、ちょうどいいわね』

「そ、そうね！まだ魔法の使い方なんてわかんないしね！」

そう、アリサの目的はここから脱出すること。

そのための力をアリサは手にしたのだ。

（それに早いところ、ここから脱出してみんなに知らせないと・・・！）

シンの目的は機動六課の壊滅。

それを阻止するために、一刻も早くここから逃げ出さなければならぬ。

そのためには、まずは魔法の使い方などを覚えなくてはいけないのだ。

「とりあえず、デバイスの名前を付けてやらねーとな」

あ、とアリサは重要なことを思い出したのか、いきなりデバイス達に謝った。

「ごめん！2人とも！」

目の前に両手を出してデバイス達に語りかける。

『別に気にしてねーよ』

『そんな謝らなくてもいいですよ。急な出来事の連続ですもの。忘れることも1つや2つあってもおかしくありませんからね』

デバイス達は交互に仕方ない、といった感じでアリサに言う。

「ほんと、ごめんね2人とも・・・」

しゅん、となってしまうアリサ。

そんなこともお構いなしにシンは勝手に話を進めようとする。

「デバイスの名前なら俺が決めてある。てか、今決めた」

「ちょっと、なんであんたが決めなきゃいけないのよ！」

「俺が作ったデバイスだ。俺が名付けるのは普通のことだろうが」

シンの言っていることは確かに間違いではない。

作り手がその作品に名前を付けるのと同様、デバイスを作った身としては名付けないわけにはいかない。

アリサはそのことに対して不服そうな顔をしながらもどこか納得している自分がいた。

「ふーん、じゃあ一応聞くだけ聞いてあげるから言ってみなさいよ」

『いいのか、主？』

「まあ、不服ではあるけど、確かにシンの言っていることも最もだと思っただのよ。あとはあなた達がそれでもいいって言うならそうするわ」

『私は主に決めていただきたい』

『俺もそうだぜ』

デバイス達は自分達の主であるアリサに決めてほしいという意見だった。

それを聞いたシンは、はあとため息を付いて仕方ないといった感じで言った。

「だ、そうだ。俺が決めるよりお前が決めたほうがいいみたいだな」

「いいの？ あんたはそれで？」

確かにデバイスはシンが作ったもの。

で、あれば自分が決めていいものを、シンは自分の考えよりデバイス達の意見を優先させたのだ。

シンにとっては名前を決めることはそれほど重要じゃないということにとらしい。

「俺はどっちでもいい。決めるのはお前だ」

「・・・わかったわ」

作り手の許可は下りたが、急に言われてもすぐには出てこない、と言った感じだった。

改めて、アリサは二つのデバイスを見る。

と、そこである疑問が浮かんだ。

「ねえ、なんでこの子達ってこんな色なの？何か意味があったりとか？」

始めデバイスを手にしたときは、両方とも銀色に彩られたものだったが、アリサが契約を行う際にはすでに黒と赤に変化していた。

「俺の作るデバイスはちょっと特別でな、使い手の心を読むんだよ。それによって多種多様に変化する」

「心を読む？まあ、自分で言ってるんだけど、赤はわかるわ。でも黒って・・・」

『・・・』

デバイスは黙って成り行きを見守っていた。

それもそのはず。

このことについてはあまり語りたくないことでもあったからだ。

なら、そこで止めてしまえばいいと思うのだが、これはアリサにとって今後重要になってくるキーワードでもあった。

「なんだ、1つは気づいてるじゃないか。なら、もう1つのほうも気づいてもいいんだがな」

「どうということ？」

シンは気付いていた。

アリサの中に眠る感情を、想いを。

それはアリサが連れ去られた時のこと。

シンが使い魔としてアリサと勝手に契約した際に覗いた魔力の源、原点となるものだった。

（ほお・・・これはなかなか面白い）

シンはそれに興味が沸いて、そのまま契約を済ませたのである。

「どうもこうも、お前のことだろ？お前が1番わかってるんじゃないのか？」

「・・・・・・・・」

シンは、にやりと口元を歪め、そう言い放った。

アリサは気付いていた。

自分の中に眠る感情を、想いを。

それは誰にも気付かれず、誰にも話すこともなく。

だが、気付かれてしまった。

自分の奥深くに押し留めて置いていたはずの感情を、想いを。

そして、それを再確認させられることになろうとは思ってもよらなか

っただろう。

「っ!!」

「ふん、気付いたか。面白いやつだな、お前って」

アリサを他所にそれについて語るシンは、新しいおもちゃを見つけた子供のような思いだった。

「その心に宿す二つの想い。一つはその正確からでもわかるように情熱を秘めた熱き心。そして、もう一つは――」

そこまで言って、アリサは言葉を遮る。

まるで、それを気付かされたくないように。

「違うっ!!」

その瞬間、アリサの心が震えた。

「違う? 何がだ?」

うるさい。

「お前の心の想いってやつを俺が変わりに言ってやってるだけだろ
う?」

うるさい。

「ああ、そうか。それに気付いたら壊れちゃうかもしれないからな

」

ウルサイ。

「大切な関係ってやつがよお・・・！」

ウルサイ！

「そりゃそうだ！気付きたくないだろうなあ！なんせお前に巢食ってるもう一つの心の正体は——！！！」

その時、昔、聞いた声がアリサの頭の中に流れていった。

（私達、いつまでも一緒だよ！アリサちゃん！）

第6話 『力の根源、心の闇／中編』 (後書き)

デバイス名募集中／W

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8099p/>

ヤミとホノオの魔法使い

2011年9月7日12時46分発行